

どうして日本に？

日本で人に会うと、いつも「日本に来られて何年になりますか？」と聞かれます。「もう 50 年になりますよ」と答えると、次の質問は決まって、「なぜ日本に来られたのですか？」です。私はいつも「あなたに会いに来たのです」と答えます。そう答えると、相手の方は驚いた顔をされます。そこで私は、「あなたに会いに…」という言葉にはたいへん深い意味があるのです」と話します。日本人にとっては、初めての出会いということは何か神秘的な不思議な意味あいを感じさせるようです。英語の ENCOUNTER は日本語では「出会い」です。私はこの「出会い」という言葉が好きです。というのは神の摂理との出会いによって私を日本に導いてくれたのだと感じるからです。

Gerry Bourke から 滞日 50 年記念に Interfuse 誌（アイルランド・イエズス会の会誌）になにか小文でも書いてみてはという話がありました。その時、私が日本への宣教（当時はミッションといわれていました）を志願する際にどのように神の導きがあったかをアイルランド在住の同僚のイエズス会士たちに伝えることはいい機会かもしれないと思いました。

思えば、Belvedere の 高等学校に通っていた頃に私の日本との最初の出会いがありました。それは Belvedere でフランシスコ・ザビエルと出会ったことからです。そこでは 12 月 3 日にはいつもザビエルを祝う特別なミサとお説教がありました。日本という国についての話と、とりわけフランシスコ・ザビエルの神への奉仕のための完全な自己犠牲について聞いたのはそのときが初めてだったと記憶しています。ザビエルという一人の人間から私の心の奥深くにインスピレーションを感じました。それから数年間、その「種子」は徐々に私の中で育ちました。そしてザビエルと同じイエズス会に神の召し出しがあったのです。

Emo での 2 年間が終わるころ、Donal O'Sullivan 神父は私をフランスの Laval にある Juniorate に送りました。Donal O'Sullivan 神父はアイルランドから毎年一人か二人をフランスに送って、フランス語の研修と異文化教育をおこなわせるという方針を持っていました。O'Sullivan 神父は、当時アイルランド管区がヨーロッパにむけて窓を開くことが必要だと感じていました。私の前にすでに二人、Frank Keenan と Andy Mills が前の年にフランスに送られていきました。Frank Keenan

と私が一緒に過ごすようになって1年たったころ、つまり私のフランス滞在2年目に入るころ、フランスに新たな Juniorate が Aix en Provence (プロヴァンス) に設立されました。そして私はそちらのほうに移されました。この2年目の年には、Aix 大学にも通い、フランス語、フランス文学、フランス文化などのいくつかの授業にも出席しました。住まいは Jesuit community of La Baume-Sainte Marie でした。共同体では私はただ一人フランス人ではありませんでした。しかし一般の学生は世界中から来ました。このフランスにおける国際的な体験を通して、神は静かに私を導いて下さっていたということに、いまさらながら気づくのです。

同じアイルランド人のイエズス会士が何人が近くにいて心理的、精神的な支えがなくても、何とか自分ひとりで、外国人のイエズス会士たちと折り合いもよくやっていけることに気づきました。

1955年に哲学の勉強のためにアイルランドの Tullabeg に戻ってきました。そこでたくさんの 困難や失敗('The Bog') の思い出があります。しかし何とかピンチを切り抜けて、たいへん有意義な時間を過ごすことができました。ご存知のようにこの哲学コースを修了すると、管区長は私たちの今後の行き先を決定します。イエズス会士としてどんな生き方をすることを神は望んでおられるのか、……私はいつもそのことを考えていました。祈りの中で神は私にこの国を離れ、また家族、友人とも離れそして日々の生活の中で神に頼るしかない遠い外国に行くことをお望みになっておられると考えている自分に気づきました。

正直に言えば、私の気持ちはアイルランドに留まって、イエズス会士として神のために働くのがいいのではないかというものでした。しかし自分の心の中で神は私に何をお望みなのかと考えれば考えるほど、神は私に宣教への道を特に日本への宣教へとお招きになっているという確信が深まっていきました。何故日本へ? いくつかの理由があります。そのうち私がアイルランドで大切に思っているすべての人たちやものを犠牲にするように神が求めておられることに気づきました。

アイルランド管区の二つの宣教地ザンビアと香港も考えました。しかし私の能力と性格の弱さから考えて、アフリカでは自分のベストをつくせないと思いました。そこで香港ということも考えました。東洋に魅力を感じました。またアイルランドで何人かの中国人のイエズス会士に会ったこともあります。しかし祈れば祈るほど神はほかの土地、日本を示されているという思いが強まりました。

その頃すでに Tullabeg の数人のスペイン人神学生は、日本に行くことが決まっていました。Joe Palacios と Miguel Suarez は そのうちの二人です。もう一人、たいへん親しい友人 Jesus Guiral は結局は日本に行くことなく、後にイエズス会を離れましたが、彼は日本の宣教と日本人について話してくれました。彼らは当時日本のイエズス会準管区の長上であったアルペー (Arrupe) 神父が日本人について書いたものを渡してくれました。Arrupe 神父は、日本人の繊細な感受性と天性の善良さと礼儀正しさについて述べていました。日本人は他人の気持ちを察することを大事に考える、やさしい人びとであり、他人に耳を傾けるよき聞き手であると言っていました。

また Arrupe 神父は、「日本人は自然を親しいものと感じ、沈黙によって気まずく感じることもないと指摘していました。日本人は好奇心があり、理屈だけではなく、英語の *affection* (愛情、思いやり) や *warmth* (温かさ) にあたるスペイン語の *cariño* (スペイン語辞書では、「愛情」「愛着」...) によって相手の心を捉える」と書いていました。またフランシスコ・ザビエルは日本人を「われわれが出会った最高の人々」と呼んでいたと Arrupe 神父は述べていました。それまで私は一人の日本人にも会ったことがなかったのですが、多分このような日本人の間で気持ちよく働くことができるであろうと深く心の中に感じていました。

もう一つの理由として、日本管区が英語のできるイエズス会士の派遣を求めていたという事情がありました。Belvedere における最初のザビエルとの出会い、Aix-en-Provence での諸外国人との共同生活の体験と彼らうまくやっていけたという事実をよく考えると、日本管区へ赴任するということが、私の心の中で特別な意味を持ち始めました。私は長い間祈り、識別しました。そして私自身を日本のために捧げることをたとえ却下されるとても、それが少なくとも神の意向に違いないと静かに感じ始めました。

当時は日本に行きたいと志願した場合、イエズス会の総長 (Fr.General) に手紙を書かねばなりません。私はまず自分の尊敬もする、そしてたいへん好きな人物でもあった Emo の Donal O'Sullivan 神父に相談しました。ところが神父は、私が管区を離れることに大反対であり、それを押し切って強行しようとするとは許せないと言いました。私はそこで先に述べた日本行きを志願するいくつかの理由を述べるとともに、若し希望が却下されるとしても少なくとも志願すべきであると心の奥底に感ずるものを見分かっていただけるように説明しました。私自身を神に

捧げることだけで十分でした。

そして私はLuigi O'Grady管区長にイエズス会総長に手紙を書くと伝えました。手紙を1957年12月8日に投函しました。その手紙で、私が日本への宣教を志願するさまざまな理由を述べました。アイルランド人の若いイエズス会士の可能性は三つ：一つはアイルランドで働くこと、二つ目と三つ目は香港またはザンビアに赴くこと、そして今まで述べたような理由に第四の可能性として日本へ行くこと……もし私の日本行きがいいことだとお考えになるのなら、そう決定して下さい。

3月にLuigi O'Grady管区長が視察に来られ、その時に直接決定を聞くことになりました。……「あなたは日本に行けるようになりました」と。……正直に言えば私にとってたいへんな衝撃でした。それは あたかも自分の足の下に巨大な黒い穴が開き、知り合いなど一人もいない未知の世界に落下していくような感じでした。どんな未来が私を待っているのか？見当すらつきません。他の三つの扉は閉ざされました。それは死の宣告のようでした。とはいっても私の心の底にはなんとも言えない安らぎがありました。今まで心の中で静かに考えて辿り着いた結論だったからです。

とはいっても両親のことが心配でした。日本行きのことは両親には一切してなかったのです。そこで私の日本行きが総長によって承認されたと管区長から聞き、両親に手紙を書きました。これはたいへん書きにくい、難しい手紙でしたが、光りを求めて祈りを捧げ、手紙を書きました。

両親からの返信の手紙はいまでもちゃんと保管しています。両親の手紙の言葉は決して忘れられるものではありません。

両親からの手紙をみなさまと分かち合わせて下さい。

母の手紙から：

きょうあなたの手紙を受け取りました。ショックを受けたなどという穏やかな表現で伝えることは出来ません。まともな手紙が書けるようになるには、時間が必要です。あなたが海外布教に派遣されるかもしれないということは受け入れられるとしても、

何とか息子だけにはこのアイルランドの地に残って欲しいといつも願い続けていました。しかし思えばドナルがイエズス会士になったとき、私たちはすでに息子を神に捧げたのです。何も求めずそして心をひろくもって息子を神に捧げたことを祈りましょう。

あなたの日本行きは、私たち一同にとって大きな犠牲になるでしょう。しかしそれが神の思し召しであるのならば、そしてほかならぬ神への愛ゆえにそうするのだからこそ、そこから幸せを得ることができるのでしょう。日本行きはあなたにとって素晴らしい興味のあることでしょう。日本は美しい国であり、そこでは神のためにすべきことがたくさんあると信じます。

3年間の中間期の後、アイルランドに帰ってきて神学の勉強をするのかそして日本管区のために叙階されるか知りたいです。おそらくそうではないかと思います。

あなたが遠い、遠いところへ行ってしまう、そして、またいつ会えるかわからな…そう考えると、それだけでたいへん寂しいです。そう思いながらも、同時に私はあなたをたいへん誇りに思っています。

私の心にいつも浮かんでくる福音書の次の言葉から力をもらいましょう。

Did you know that I must be about My Father's business? (ルカ伝 2:49)

「どうしてわたしをお探しになったのですか。わたしが必ず自分の父(なる神)の家にいることを、ご存じなかったのですか。」(*)

日本への布教についていい小冊子のようなものがあつたらどこで手に入れられるかを教えてください。

頭の中は真っ白で混乱しています。今はこれ以上筆を進めることはできません。次の手紙でまた書きます。

いつもあなたへの愛を忘れる事のない母より

* (注) ……以下の聖書の引用が分からないと理解しにくいので、引用します。

ルカ福音書から

さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り、祭りの期間を過ごしてから、帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかなかった。イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを行った。それから、親族や知人の中を捜し回ったが、見つからなかつたので、イエスを捜しながら、エルサレムまで引き返した。そしてようやく三日の後に、イエスが宮で教師たちの真中にすわって、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。両親は彼を見て驚き、母は言った。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」

ルカ 2:49 するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお探しになったのですか。わたしが必ず自分の父(なる神)の家にいることを、ご存じなかつたのですか。」 =Did you know that I must be about My Father's business?

しかし両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかつた。それからイエスは、いつしょに下つて行かれ、ナザレに帰つて、両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人とに愛された。

父からの手紙

ドナルよ、お前の手紙で、お前の日本行きの話しさは初めて聞いた。それは爆弾を落とされたような衝撃だった。お母さんも私もみなあまりの驚きに、腰を抜かしていまは立ち上がれない状態だ。言うまでもないことだが、利己的な気持ちからでもあるが、お前がアイルランドの大学に赴任していたら、しばしば息子に会えると期待していたのに……ダブリンであつたら…。それが偽りのない率直な気持ちだ。

しかし思うに、「ことを計るは人、ことを為すは天」という言葉もある。私たちは、お前が手紙の中で言い表した素晴らしい感情とこのような英雄的な犠牲を厭わない崇高な目標に心をあわせようすることはできる。もちろん心の奥底では、自分自身と自分の能力を日本のカトリックへの改宗のために捧げることを誓めてやりた

い気持ちでいっぱいだ。言うまでもないが、お前の選んだ道は、たいへん苦しい闘いであり、なかなか報われない仕事だ。

今まで私の日本人について聞いてきた話では、日本人はキリスト教の見地からは、宗教的には梃子でも動かない頑固な人々であり、知識人の間でも祖先崇拜、天皇崇拜、そして影響されにくいことは花崗岩のよう…という困難な状況があると…。

父親の私にとってたいへん重要な質問は——3年間の日本での中間期のあと、Bourke 神父がそうだったように神学履修にミルタウンパークの神学院に帰ってくるのかどうかということだ。私のような *auld man!* へのそのような配慮を期待してもいいということであれば、お母さんにも私にも息子との別れの辛さが多少とも軽減し、少し気持ちが楽になるのだが…。当然のことながら、お母さんは、このままお前と一生会えずに別れてしまうのではないかと動轉している。あとでミルタウンパークに帰ってきて、そこに滞在するという可能性があれば、お母さんの気持ちを支えることが出来るのだが…。この点については Donal O'Sullivan 神父からもお話を聞こうと思っている。

神父様は 悲しみにくれるお母さんに慰めの手紙を書いてくれるだろう。お前がフランスに行くときも Donal O'Sullivan 神父はそうしてくれたことを覚えている。

ただ Donal O'Sullivan 神父は、お前の考えていることについて私たちに伝えることができなかつたと思う。ドナルの日本行きの決定の最終段階では Donal O'Sullivan 神父は相談を受けていたはずだ。

現世と死後の世界のために働くお前のすべての大事がうまく行くように
すべての愛をこめて 父より

Donal O'Sullivan 神父から私宛の手紙:

親愛なるドナルへ
あなたから依頼されたとおりにしました。あなたを含めみんなのための祈りの中で、
私のしたことがあなたの役に立つよう祈っています。そう言いながらもあなたの希